

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20209

研究課題名（和文）異文化の境界に生きる外国籍教員の役割：日本の公立高校を例に

研究課題名（英文）The Different Roles of Foreign Teachers Living on the Cultural Border: A Case Study of Japanese Public High Schools

研究代表者

王 一瓊 (Yiqiong, Wang)

大阪大学・大学院人間科学研究科・特任助教（常勤）

研究者番号：70913523

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、公立高校で働く外国籍教員の複合的な役割を明らかにし、その複合性に起因する外国籍教員の葛藤を解明することを目的とした。参与観察及び教員へのインタビュー調査を通じて、外国籍教員は自らの複合的なアイデンティティを活用した教授法を実践し、より充実した授業を行うことがわかった。一方で、外国籍教員は外国人生徒にとって感情的に近い存在となるため、日本人教員以上に「指導」や「支援」を求める傾向にある。それで生じたトラブルが、外国人同士の問題だと片付けられてしまい、外国籍教員が一人で解決しないといけなことが多いためは現段階の課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本の教育現場におけるグローバル化に伴う外国籍教員の役割についての研究として重要だけではなく、日本の教育現場におけるマイノリティ教員の存在とその役割についても探究するための試金石となっている。また、外国籍教員の教育実践である「異文化の境界の往来」は、教育文化の多様性について根本的な問いかけを行なっている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the different roles of foreign teachers working in public high schools in Japan and explore the conflicts experienced by these teachers due to their multiple identities. Through participant observation and interviews with teachers, it was discovered that foreign teachers employ teaching methods that leverage their diverse identities, resulting in more active classroom. However, since foreign teachers tend to be emotionally closer to foreign students, foreign students seek more "support" compared to their Japanese teachers. If foreign national teachers are unable to meet the needs of foreign students, it can lead to conflicts. However, these conflicts are often perceived as issues solely between foreign individuals, and the responsibility for resolution is placed solely on the foreign national teachers. This situation is considered a significant challenge at the current stage.

研究分野：教育社会学

キーワード：外国籍教員 複合的アイデンティティ

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル化に伴う外国人児童生徒の急増は、文部科学省においても重要課題の1つとなっている。しかし、その対応策は日本語教育に軸足があり、社会学領域で培われてきた外国人研究の知見が反映されているわけではない。そうした状況で、大阪府の公立高校は外国籍教員を常勤講師として積極的に採用している。外国籍教員は日本の学校文化と外国人生徒の母文化の溝を埋める役割が期待されている。一方、彼らは生徒指導等といった公立学校の教員としての役割が与えられ、日本の学校方針と外国人生徒のニーズに挟まれている。そこで、本研究は日本の公立高校に勤務する外国籍教員を対象とし、参与観察とインタビューを通して複合的な役割を明らかにする。

日本では、外国人教育研究は盛んに行われている。公教育に関心を持っている教育社会学では学校文化に着目したものが多し。広瀬他(2019)などはグローバル化時代での教師の多様性は有意義だと指摘し、外国籍教員の雇用状況を分析している。外国籍教員は社会的意義と実践的意義(García et.al 2006)を有しているが、現段階では政策・制度といった社会的意義に言及するマクロレベルの研究が多くミクロレベルで教育実践に着目する研究が不足している。

一方、外国人教育研究の中でも特に注目されている言語問題に着目した応用言語学には日本語習得と外国人生徒の自己形成などがあるが、外国人児童生徒に着目した研究は多く、教育の担い手となる外国籍教員に関する研究は乏しい。語学教師の教育実践と意識の相互作用を考察する研究が多くなされている(Tsui 2007 等)が、これらの研究は教師を言語教育の担い手としてのみ扱う傾向が強く、生徒指導など公立学校の教員としての役割を視野の外に置いているという限界がある。

## 2. 研究の目的

上述した先行研究を踏まえて、本研究は、外国籍教員が教育実践を行う社会的コンテクストを踏まえながら、教室での教育実践と外国籍教員の役割認識の相互作用を解明し、多様な役割を果たしている外国籍教員の教育活動の実態と課題を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、参与観察及びインタビューを通して、外国人生徒の指導に従事する日本の公立高校に勤務する外国籍教員の複合的な役割を解明することを目指した。そこで、第一年度では、外国籍教員が置かれた政策・制度といった社会的コンテクストの変遷の流れや、外国人児童生徒に係る教育政策の新たな動きといったマクロな面をまとめた。それを踏まえて、第二年度では、関西圏の公立高校でフィールド調査を実施した。例えば、外国人生徒向けの入学オリエンテーションなどにも臨席し、外国籍教員の実践を観察した。また、外国籍教員2名に対してインタビュー調査を実施した。

## 4. 研究成果

(一部)

本研究は、調査を通して、外国籍教員の役割及び、外国籍教員が直面する課題を以下のようにまとめた。まず、外国籍教員の役割についてである。

- 外国人教員は個別のアイデンティティを生かして、ペダゴジーとして活用していただくだけでなく、複合的なアイデンティティを利用することで、より充実した授業の構築に繋がったと考えられる。
- 外国籍教員は日本の学校文化と外国人家庭の母文化の溝を埋める役割を果たしているだけでなく、異文化コミュニケーションで生じた衝突を調和していくコーディネーターとしての役割も果たしている。
- 外国籍教員は言語教育以外、入学直後の外国人生徒の家庭状況の聞き取り、入学後の学生指導、部活指導、進路相談などを通して、外国人生徒の心的ケアを行なっている。外国人生徒を安心させる居場所づくりにも大きく貢献している。

上述した外国籍教員の役割を踏まえて、外国籍教員が置かれている環境を鑑み、以下の課題をまとめた。

- 外国籍教員は外国人生徒と類似した文化背景を共有しており、「心に届く」指導を実現できたが、生徒と教員の距離の近さによって、生徒指導にネガティブな影響があること

が観察できた。なぜなら、外国籍教員は外国人生徒との距離が近く、日本人教員よりも多くの指導や、心理的なケアを外国人生徒に求められてしまう傾向があるからだ。そのため、外国籍教員は外国人生徒の要求に対してストレスに感じる場合もあり、外国人生徒への対応に戸惑ってしまう場合もある。

- 外国人生徒からの「攻撃」が周りの日本人の教員に理解してもらえずに、外国人同士の内部の問題だと片付けられてしまう傾向がある。そこで、外国人教員が一人で解決しないといけないことが多いのは現段階の課題だと考えられる。

上述した調査結果から、外国籍教員は日本公立学校の教員の組織の中でどのように位置付けられているかを問い直す必要があると考えられる。このように、本研究は、外国籍教員の教育実践及び直面している葛藤を描き出すことによって、教育文化の多様性から、「異文化の境界における往来」とは何かを問い直すきっかけになると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 王一瓊	4. 巻 21
2. 論文標題 多文化教育におけるエンパワーメント再考：言語的少数派の生徒を抱えるカリフォルニア州の公立高校を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会言語学	6. 最初と最後の頁 137-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王一瓊	4. 巻 22
2. 論文標題 多言語社会におけるこれからの言語教育に関する予備的考察：大阪府の公立高校で行われている母語中国語の授業例を参考にして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会言語学	6. 最初と最後の頁 79-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王一瓊	4. 巻 24
2. 論文標題 書評 尾辻恵美・熊谷由理・佐藤慎司(編)『ともに生きるために：ウェルフェア・リングイスティクスと生態学の視点からみることばの教育』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことばと社会	6. 最初と最後の頁 231-235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 王一瓊
2. 発表標題 外国にルーツを持つ生徒と教師の複数言語を用いた相互作用 日本の公立高校で行われる母語の授業を例に
3. 学会等名 日本教育社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王一瓊
2. 発表標題 多文化教育とエンパワメント：関西圏の公立高校の実践を例に
3. 学会等名 東アジア日本学研究会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 王一瓊
2. 発表標題 異文化を生きる外国人教員の複合的役割：日本の公立高校を例に
3. 学会等名 日本教育社会学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 王一瓊
2. 発表標題 多言語社会における母語教育の意義：大阪府の公立高校で行われる母語中国語の授業を例に
3. 学会等名 言語政策学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------